

在職中の思い出

石川義孝

教室創立50周年、おめでとございます。大阪市立大学を辞職して早4年半が過ぎたが、教室からの寄稿依頼に従い、在職中の思い出を書かせていただく。

私は、1985年4月に専任講師として着任し、今の文学部棟1階の北側にあつて書庫とつながつた、夏はどこからか蚊が侵入してくる、やや暗い共同研究室に入ることになった。あの頃は、教員の相部屋が普通だったが、その後1年ほどして、教室全体が文学部棟4階に移動することになり、私は北側に一室いただき、研究室として使わせていただくことになった。この引っ越し作業は楽ではなかったが、ともかくその結果、教員はそれぞれ一部屋が与えられ、眺望もぐつとよくなって、住み心地がだいぶ改善された。ただ、最上階にもかかわらず、エアコンがないので、夏は天井が炎天で灼かれ、一日の最高気温が35度を越えるのが普通で、ずいぶん閉口した。もっともこの経験で、東北生まれの私に、暑さに対する忍耐力が培われたような気もしている。



その後90年代初めに、パブル景気による大阪市の財政事情好転のおかげもあったと思うが、文学部棟の隣に高層の法学部棟が建ち、ついで経済研究所と文学部棟をつなぐ場所に、現在の文学部増築棟が建設され、95年になって地理学教室が全面移転するに至つて、教室の建造環境は大きく改善された。それまでの数年間は、地理学教室の学舎整備委員をずっと続けていただけたに、新築の建物への移転が実現した時には、やれやれという思いであった。ただ、私は95年3月末に転出したので、わずか2ヶ月ほど増築棟に入ったにすぎない。ともあれ、着任時の暗くて狭い部屋を思い返すと、インフラストラクチャーの面での整備は、とても有り難かつた。

私は、1995年3月までの満10年間、年齢で言うと、32歳から42歳まで在職させていただいた。この間、教室ののびのびした雰囲気の中で自由に研究に打ち込めたことを、とても感謝している。今から顧みると、市大に在職した10年間は、本当に有意義であった。

以上は、やや堅めの思い出である。次に、少し柔らかめの思い出を述べたい。楽しい思い出はいくつかあるが、ここでは、秋の教室巡検のことを書きたい。愉快だったのは、旅行それ自体というよりも、何と言っても、最後の晩に繰り広げられる宴会であった。私の着任当初、巡検の夜にもちろん毎晩酒は飲んでしたが、話題が固い上に雰囲気暗く、これが市大の伝統なのか、と妙な感銘を受けたことを覚えている。しかし、お笑いの殿堂である大阪市が経営する大学の教室の宴会が、こう暗くてはいけないと思い、その後は宴会を明るくするよう、院生・学生を焚き付けた。

その頃の学部学生に、松原啓介君や平井雅也君をはじめ、ひょうきんな人達がいたことが幸いだったし、毎年4月の教室のオリエンテーションを田中会館で行うさいに、院生の丹羽弘一君や長尾謙吉君あたりが中心となつて、新専攻生に秋の宴会で発表する芸の重要性を半年前から説く、という慣行

もできあがりつつあった。こうして、その後一気に、教室巡検最終日の宴会が盛り上がりつつあった、と記憶している。

最盛期には教員も芸を強いられ、渋々と（あるいは喜んで）芸をしていた時期もあった。その頃は宴会が近づくと、私も含め教員もずいぶん緊張していたように思う。教員がらみで大きな笑いを取り、今でも記憶に残っているのは、山野先生と新見和也君が演じる助さん・格さんを従えた、今は亡き服部先生が扮した水戸黄門である。私が覚えている範囲内の、学生・院生による出し物のベスト・スリーは、以下の通りである。

第1位は、下関に集合してから、秋吉台や萩に回った巡検の宴会で披露された二人羽織で、演じたのは、高野美和子さん（現姓吉井さん）・出口愛さん（現姓榊家さん）・柴田道子さん（現姓吉武さん）・島本悠加さんの4人である。彼女たちは、集合場所に瀬戸内海経由の夜行フェリーできたのであるが、その船中でのつれづれを紛らすために、あるいは宴会での好評を期待してかは不明であるが、ともかく懸命に練習に励んだ模様であった。宴会では平野先生の物真似で大喝采を受け、みんなでとにかく笑いに笑った。教員の物真似で笑い取るというのは学生の定番で、その意味でやや安易であるが、出し物のアイデアが面白く、かつ、とった笑いの大きさという点では、これが最右翼ではないかと思う。

第2位は、現在富山大学の教員をしている丹羽君の芸である。部屋の灯りを全部消して、90%を越す高純度のジンを口に含み、一気に霧状態で口から吐き出し、ライターを擦るという危険きわまりない芸で、真っ暗な部屋の中に、火炎放射器よりは勢いの弱い炎が一瞬だけ吐き出される、という幻想的な出し物である（後輩諸君、真似をしてはいけない！）。感動した学生から再演を求められた本人が、この芸は一瞬のタイミングが難しく、繰り返しやるのは簡単じゃないんだ、と言い訳していた光景を今でも覚えている。

第3位は、山岡経子さん（現姓小倉さん）と濱本清美さん（現姓広瀬さん）が演じたフォークダンスである。お二人は確かフォークダンス部の部員で、教室巡検の宴会での芸の重要性を認識し、正式なダンス衣装とテープレコーダー・カセットを持参するなど、用意周到であった。1曲踊った後、宴会参加者の学生・院生・教員に、「これは、どこの国のダンスでしょうか?」と、次々に質問するというクイズ形式の出し物であったが、正解がなかなか出なかった。この時にお二人が決まって最後に質問を振るのが中村先生であったが、先生はたいてい正解をお答えになられた。このあと知ったところによると、フォークダンスは元来スラブ文化圏で盛んでそう、中村先生が正解を言われるのもなるほどであった。これは、気合いの入った演出に加えて、地理学的センスがちょっと光った芸として、私の記憶に残っている。

その他に、ベスト・スリーの選には惜しくも漏れているが、松村嘉久君がモスクワ空港での靴磨きに扮し、確か新専攻生が演じた、右も左も分からない日本からの学生観光客を、軽くあしらった英語での寸劇も良かったし、イギリスのニューキャッスル大学のスチュワート・フォザリンガム教授を招聘外国人研究者に迎えた1994年秋に、桜島の宿舎で、市岡秀紀君の学年の男子学生が、今度は私の物まねで笑いをとった芸も、印象的であった。

今日のような大学再編・大学院拡充の時代にあつては、各大学の地理学教室がそれぞれ独自の特色

を持つのは、本来、大変結構な事である。そのような特色は、教室の存立にとっての不可欠の要素の一つとなっている、と言っていいかもしれない。上記のような、教室巡検での宴会の活発さは、それ自体、教室の教育・研究の水準に一見無関係のように思われるが、それが、教室の教員・院生・学生の全員をリラックスさせ、知らぬ間に教室の教育・研究にプラスの効果を与えてきたかもしれない、と想像するのは楽しいことである。

ちなみに、フォザリングム教授は、当時、被引用回数からみた世界の人文地理学者の上位100人の中に入っていた。そのような著名な地理学者に、日本の地理学の現状を率直に伝えてみたいと考え、その一環として、私の大学院の授業で、受講生の長尾君・松村君・濱名研君のご協力を得て、わが国の主要地理学教室の研究面での生産性ランキングを作成し、授業で詳しく結果の発表を行った。それによれば、大阪市大は当時わが国で3位、という好位置にあった。類似の試みは米国では毎年あり、各大学・各教室が自らのアイデンティティを模索するための有力な判断材料として使っているが、そのようなランキングは、日本の学問風土にはあまりあわないだろうと考え、詳細はどこにも発表していない。

ただ、京大に転出した直後に、院生による歓迎会の席上の挨拶で、当時ドン底状態にあった京大の院生を叱咤激励するために、このネタを一部使わせていただいた。その挨拶の内容は、京大地理学教室の卒業生の会である地理学談話会の会報 No. 6(1995年)に、「がんばらなあかんで、院生！」という題で書かせていただいたので、一言お断りしておきたい。



長居公園グランドで行われた文学部の新入生歓迎ソフトボール大会で、<地理>チームが好成績を収めた時の記念写真。私が左手に持っているのが、賞品のビール券の入った祝儀袋。写っているメンバーから考えて、撮影はおそらく1989年か90年の7月である。

(旧教員)